

雅にして強かなる罠

——『アントニーとクレオパトラ』における
紳士の形成の危機

北村 紗衣

シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』において、ポンペイはアントニーをとらえて離さないエジプトの逸楽についてこう語る。

But all the charms of love,
Salt Cleopatra, soften thy wan'd lip!
Let witchcraft join with beauty, lust with both,
Tie up the libertine in a field of feasts,
Keep his brain fuming; epicurean cooks
Sharpen with cloyless sauce his appetite,
That sleep and feeding may prorogue his honor,
Even till a Lethe'd dullness —¹

されども淫らなクレオパトラよ、
かの愛の妖術を総動員し、自らの血の気の失せた唇をふっくらと
潤わせろ！美貌には魔術を、そしてさらにその上に欲望を肉付けし、
あの放蕩者を宴の前線につなぎとめ、
奴の頭が酒で煙るようにしておけ。エピクロスの園にも
ふさわしい料理人があいつの食欲を飽きのこないソースで
鋭くとがらせ、眠りと食事をむさぼるうちに自らの名誉を食いつぶし、活気
を失って何もかも忘れてしまうようになるまでな。

ローマの男たちにとって、エジプト王宮は連日の 'lascivious wassails' 「淫らな酒宴」(I. v. 56) によってローマ人の理性を鈍らせる危険な場所であり、そこを治める女王クレオパトラは魔術を弄してアントニーを籠絡した淫らな年増女である。勤儉な経済システムを有するローマに対して、エジプトの経済システムは「奢侈に基づく生活様式、過剰の経済を示す『普遍経済』²」に基づいて無尽

蔵に快樂を供給し、その結果ローマの男たちのエネルギーはひたすら消尽させられることとなる。クレオパトラを愛するアントニーは「この手強いエジプトの足かせを破らねばならぬ、さもないと愛に溺れて自ら身を滅ぼすことになる³⁾」と、エジプトではともすれば快樂に溺れ、懦弱に流れてしまうことを自覚しているが⁴⁾、結局はローマに帰ることなく「エジプトに馴染み、クレオパトラに融合し、最終的にはエジプト化していく⁵⁾」こととなる。『アントニーとクレオパトラ』におけるエジプトはジュリアス・シーザー、大ポンペイ、アントニーといったローマの名だたる男たちを魔力で絡め取り、「足かせ」をはめてしまう場所である。ローマ人の目から見たクレオパトラは、この「魔窟」のごときエジプトを統治し、ローマの男性をとらえて消耗させる魔女として表現される。

『アントニーとクレオパトラ』におけるエジプトは、魅惑と危険の両方が支配する極めて特異な場所である。本論文においては、『アントニーとクレオパトラ』という芝居におけるエジプトという舞台の特殊性に着目し、エジプト及びその象徴としてのクレオパトラがどのようにとらえられているか、またローマの男たちが作中でエジプトの魅惑に対していかに「対処」しているかについて分析することとする。

1. 未知の世界と怪物

ミシーナスやアグリッパが根掘り葉掘りイノバーバスに尋ねる場面や (II. ii. 171-239)、レピダスの質問をアントニーが軽く受け流す場面からもわかるように (II. vii. 17-51)、エジプトはローマ人にとっては話の種の尽きない未知の場所である。レピダスは巨大なピラミッドのことを尋ね、蛇や鰐が太陽の光でナイルの泥から自然に発生する様子についてアントニーから聞き出そうとするが (II. vii. 24-49)、酔っぱらったアントニーがほとんど真面目に答えないにも関わらず、レピダスは 'strange' 「珍奇な」 (24, 48) を連発して感心する。クレオパトラがシドナスで初めてアントニーに会った時のことをイノバーバスが語る場面はシェイクスピア戯曲の中でも名高い場面であるが (II. ii. 190-226)、話を聞いたアグリッパは実際にその場面を見ていないにも関わらず「アントニーもびっくりだな⁶⁾」、「めったにお目にかかれなようなエジプト女だ!」⁷⁾と感嘆するほかない。クレオパトラはキューピッドを従えたヴィーナス (II. ii. 200-202)、その侍女たちは 'mermaids' 「人魚たち」 (II. ii. 207) と呼ばれるが、このように架空の生き物や神々の比喩を用いることでエジプトはあたかも神仙境のような色彩を帯びる。'serpent of old Nile' 「古のナイルの蛇」 (I. v. 25) とも添え名されるクレオパ

トラ自身はあたかもナイル河そのものから生まれ出たかのように神秘化され、アントニーに対しては人間ならぬ愛の女神ヴィーナスの姿を借りた美女として提示されることにより、ローマ人の想像をかき立てる。クレオパトラは劇中で数回「エジプト」と呼ばれており⁸、この芝居においてクレオパトラという女王がエジプトという国そのものと同一視されていることはたびたび指摘されているが⁹、クレオパトラとエジプトの同一性を強調することは「ローマ人にとっては、ローマとエジプトの絶対的差異を強調するために戦略的に必要¹⁰」なことでもある。ローマ人たちはエジプトを訪れた同朋から、ローマとは全く異質な地であるエジプトとそれを代表・表象 (represent) する存在としてのクレオパトラの様子を聞くことで「ローマによって「他者」としてつくり出されたエジプト／Cleopatraの解説¹¹」を行う。

このようにローマ人たちがエジプトを驚くべき魅惑の対象として描き出すのは、ローマ人がエジプトを征服の対象として見ていることに深く関わっている。植民地化という文脈において、スティーヴン・グリーンブラットはコロンブスが新世界を目にした際にたびたび感じた驚異の念を本国への報告で表明していることを分析し、「驚異なるものは、獲得したもののさらなる明白な証を求めてあら探しをする懐疑主義者に対するコロンブスの主張の力と有効性をまさに確証せんとする感覚の現れである。(中略) それは占有の儀式そのものと同じように、想像され、欲望され、約束されるものに満ちた言葉である¹²」と語り、驚異の表明は占有の 'the legitimation process' 「正当化の過程」(p. 74) であると語っている。グリーンブラットが述べているのは新大陸に到達したコロンブスの反応であるが、ローマ人たちがむしろローマより古いはずのエジプトを見る際に感じる驚異と魅惑も基本的にはこのコロンブスの感覚とそれほど違わない。ローマ人たちは東方の属国であるエジプトがどのような珍しい場所であるのか想像し、エジプトを訪ねたローマ人からその様子を聞き出そうとする。エドワード・サイドはナポレオンがエジプト遠征をした時に研究に赴いたオリエンタリスト達の仕事が「エジプトの古代、豊かな連想、文化的な重要性、特異なアウラをヨーロッパの観衆のために舞台にかけること¹³」であったと語っているが、まさにアントニーやイノバーバスがローマ人たちから期待されているのもこうしたオリエンタリストたちの仕事と同じことであり、彼らはローマ人にエジプトが期待通りの場所であることを伝えてやることで彼らの欲望を満たすのである。クレオパトラの金銀はしけの髻やナイル河から自然発生する珍獣などに象徴される驚異は、ローマ人たちがエジプトを占有せんとする欲望を正当化するもので

もあるのだ。

一見冷静でエジプトに対する驚きを示さないオクテーヴィアスも、このような驚異の生産によってエジプト支配を正当化しようというローマ人の欲望と無縁ではない。エジプトが敗北してもなお財宝を多く所有しているらしいことはクレオパトラがオクテーヴィアスに財産目録を提出する際に起こるいざこざから察することができるが (V. ii. 138-89)、オクテーヴィアス・シーザーはエジプトを支配下に置いたとき、内心はどうあれうわべではエジプト王国の財産自体にそれほど興味を示さない。オクテーヴィアスは財産目録を見て「シーザーは商人ではない、商人が売ったものについて値段の交渉をしたりはしないのだ¹⁴」と鷹揚さを見せるが、これは財産のことにに関してアントニーに文句をつけられた時、気分を害した様子で金銭について謹直さを示したオクテーヴィアスにしてはやや禁欲的な反応である¹⁵。第2幕第7場でアントニーがオクテーヴィアスに対してエジプトの農耕技術を説明する場面はオクテーヴィアスがエジプトの経済や科学技術に興味を持っていることを示しており、この実際的な関心のありようはレピダスが示す自然の驚異への単純な好奇心とは好対照をなしている¹⁶。また、クレオパトラの死後に語った台詞から、オクテーヴィアスが女王の侍医からエジプトの医療技術に関して状況を聞き出していたことがうかがわれるので (V. ii. 354-6)、オクテーヴィアスは最後までエジプトの優れた学問と技術への政治的関心を保持しているように見受けられる。しかしながら、一方でオクテーヴィアスはエジプト征服後にクレオパトラの偉容によってローマへの凱旋式に箔をつけられるかどうかについて並々ならぬ関心があることを隠さず (V. i. 64)、クレオパトラが「自らの目的を見抜いて¹⁷」先に自殺してしまったことを残念がっている。オクテーヴィアスは民衆の支持は些細なことで失われてしまうものだと嘆き¹⁸、また自分のことをひっそりと訪ねてきた姉オクテーヴィアに対して大衆に華やかな行列を見せつけて権力を誇示することこそ重要であるとおわせているが (III. vi. 43-50)、オクテーヴィアスにとってはエジプトの「豊かなる玉座¹⁹」を手に入れてローマ帝国の経済を潤すことよりも、「一目でも拝まなければ旅人の名がすたるような驚くべき造作の傑作²⁰」と呼ばれる女王クレオパトラを凱旋式の見世物としてローマ人に提供するほうが優先課題であるようだ。ローマの支配下に置かれた時、クレオパトラは自分と侍女たちは「エジプトのお人形²¹」としてローマで見世物にされるのだと語るが、エジプトとそこに棲息する動物たちがローマ人にとっても珍しいものであるのと同じように、美しく 'wonderful' なエジプト女性たちも 'wonder' 「驚き」をローマ人たちに見

せつけるための格好の見世物である。浜名恵美は『アントニーとクレオパトラ』において「オリエントという女性化した他者の驚きと、クレオパトラが表象するオリエントの女性の持つジェンダーの驚きが、まさに劇的に現れている」と語っているが²²、クレオパトラを「征服の磨き上げた戦利品²³」にしようとするオクテーヴィアスにとって、エジプト女性はまさにエジプトそのものの驚異を手っ取り早く証明する小道具なのだ。「エジプト名物」であるクレオパトラをローマへと連れ帰って見世物にすることは自らがエジプトを完全に制圧してローマ帝国に組み込んだことの証となる。凱旋によって提供される驚異はローマ人に提供される「パンとサーカス」のうちのサーカスとしての役割を果たし、「獲得したもののさらなる明白な証を求めてあら探しをする懐疑主義者」たる民衆を納得させる。オクテーヴィアスはエジプトの驚異をローマへ持ち帰ることにより、ローマ人たちに対して占有の正当化をしようとはかっているのである。

しかしながら、このようなエジプトの神秘的驚異はローマ人に感嘆のみならず恐怖をかきたてるものでもある。ナイル河から生まれる蛇や鱷は珍獣であるが、蛇の毒が最後にクレオパトラを殺すことからわかるように、こうしたものたちは手に負えない危険な動物でもある。そして「このへびや鱷は、いわば Cleopatra のメタファー」（朱雀、「[「ヒーロー」としての Cleopatra]」、p. 23）でもあり、「古のナイルの蛇」たるクレオパトラは単に美しいだけではなく危険な特質をも有する「動物」である。クレオパトラは怒ったアントニーに ‘most monster-like’ 「まったくもって怪物のよう」（IV. xii. 36）だと言われるが、ローマの男たちはクレオパトラのことを娼婦呼ばわりし²⁴、手に負えない珍獣のようなものとして怪物扱いする。シドナスの川でエジプトの女性たちが喩えられる人魚も、見た目は美しいものの一種の「怪物」であり、神話のセイレーンのように男性たちを誘惑し破滅させかねない存在でもある。エジプトの酒宴は限りなく魅力的なものではあるが、イノバーバスいわく ‘much more monstrous matter of feast’ 「はるかにとてつもない宴」（II. ii. 182）であり、その盛大さは ‘monstrous’ 「怪物的」な域にまで達する。エジプトの酒宴やクレオパトラの魅力はローマ人の理性を失わせてしまうという点で怪物的な不気味さを秘めていると見なされ、「魅惑の源泉、憧憬の対象でありながら、同時に悪魔的に貶められている²⁵」。ローマ人にとってエジプトの驚異は同時に不安をかきたてるものでもあるが、それはエジプトに対する驚異がその ‘recalcitrant otherness’ 「厄介な他者性」（Greenblatt, *Marvelous Possessions*, p. 75）に起因するものであるからである。ホミ・バーバは「植民地言説は、被植民者を『他者』であるものの、それと同時

に完全に理解しかつ見ることが可能な社会的実体として産出する²⁶」と語っているが、エジプトの他者性が「完全に理解しかつ見ることが可能な」うちはクレオパトラの美貌もナイル河の珍獣も単に「驚異化」されるだけでローマ人の好奇心の対象となるにとどまっているものの、ひとたびこの他者性が厄介さを発揮し、ローマ帝国を脅かし始めると今度はこうしたエジプトの驚異は脅威と化する。第3幕第6場ではオクテーヴィアスのもとにクレオパトラとアントニーがローマの属領をエジプトの傘下にしたという知らせが来るが(1-19)、ここではクレオパトラとアントニーはもはや驚異ではなく、‘insolence’「傲慢」(20)であり‘contemning Rome’「ローマを侮辱」(1)している。金銀の台座に座して女神アイシスの扮装をしたクレオパトラの派手な姿はアントニーと出会った時のヴィーナスのごときクレオパトラの延長線上にあり、基本的には何ら異なっているわけではないが、ローマ人たちはもはやクレオパトラとアントニーの豪華さを話の種に驚いて楽しむことができない。エジプトが他者性を露わにしてローマの利益を阻害し始めると、ローマ人は同じ姿のクレオパトラをローマに対する脅威と見なすのだ。オクテーヴィアスはここでクレオパトラとアントニーが「わが父の息子と呼ばれるシーザリオンと、それからあの二人が欲望に任せて作った私生児を全員²⁷」従えていると語るが、エリザベス朝演劇において混血の子供はしばしば‘monstrous birth’「怪物的出産」の産物たる「新種の生き物」として不気味な動物の比喩を用いて表象された²⁸。オクテーヴィアスがクレオパトラとローマの男たちの間にできたたくさんの混血児、とくに見たこともない自らの義理の弟について語る口調からは、苦々しさのみならず得体の知れない存在に対して感じる不気味さもほの見える。クレオパトラを愛しているはずのアントニーも、クレオパトラの気まぐれで戦況が悪化した途端‘most monster-like’と彼女を罵り始める。エジプトはローマ人にとって理解できる限りにおいては驚異であるが、ひとたびエジプトが理解できない他者性を見せ始めると「怪物」へと変身する。

そしてこのようなエジプトの「怪物性」は、クレオパトラが次々とローマの男たちを愛に溺れさせた点に集約される。アントニーは芝居の開幕部分でファイローに「われらが將軍のこの惑溺ぶりときたら限度を超えている²⁹」と批判されるほどクレオパトラに夢中であり、クレオパトラとの愛に比べればローマなどは何でもないものだと言っていてエジプトから離れたがらない(I. i. 33-9)。またクレオパトラはシーザーと大ポンペイが自らに夢中になった様子についても語り(I. v. 29-34)、そのことはアグリッパによって裏づけられている(II. ii.

227-8)。ローマ人にとってクレオパトラは、ローマの男たちを本来あるべき場所であるローマから引き剥がし、ローマが象徴する「公共の福祉に対する無私の献身という高い理想³⁰⁾」を忘却させ、私的な愛欲の世界に埋没させるがゆえに「怪物」なのである。

2. オクテーヴィアスとエジプトの驚異

ジュリアス・シーザーや大ポンペイ、アントニーのような男たちがクレオパトラに魅せられた一方で、オクテーヴィアスはこのようなエジプトの「怪物的」魅力に対してほとんど感応しないように見える。オクテーヴィアスはかつて厳しい環境のもとで飢えや渇きと戦いつつ不屈の精神で勝利をおさめたアントニーの克己心を賞賛し (I. iv. 55-71)、今やすっかりエジプトの逸楽に溺れたアントニーを厳しく批判する (I. iv. 14-33)。また、ポンペイ及びアントニーとの和解の酒宴においては「一日でそんなに酒を飲むよりは四日間まるっきり断食したほうがいいくらいだ³¹⁾」と言って、祝宴席であるにも関わらず自分に向けられた乾杯を断ってみせる。ジャンネット・エーデルマンは「若いほうのシーザーはどうやらクレオパトラの魅力に免疫があるようだ。彼は政治的目的でクレオパトラと戯れるかもしれないが、我々にはその戯れ自体に情熱がないことがわかっている。しかし男たちが単なる男以上のものだった過去の時代には、最も偉大なローマ人たちが自身が限度を超えていた³²⁾」と指摘し、若きオクテーヴィアスには過去のローマ人たちに比べて英雄的豪放さが欠けているためクレオパトラの魅力に無関心なのだと分析している。オクテーヴィアスはローマにおいてもとくにピューリタンの節制の美德を体現しているとみなされ (Thomas, p. 11)、「アントニーの持つ女性に対する多感さを共有することなど想像もつかない³³⁾」ような人物と評されている。しかしながら注目すべきなのは、一見節度ある政治家の鑑であるかのようにふるまうオクテーヴィアスも、完全に木石のごとき人間としては描かれていないということである。前述したポンペイとの和解の酒宴においてオクテーヴィアスは「私自身の舌も話が覚えない。悪酔いのせいで我々はみなひどいザマだ³⁴⁾」と語り、謹直なオクテーヴィアスも酒の誘惑に負けることがあるのだと自ら漏らしている。また、オクテーヴィアスは姉オクテーヴィアが静かに自分のもとへやって来たことについて「人の目に触れぬようにしておくとしばしば愛されぬままになってしまうので、愛というものを見せびらかすこと³⁵⁾」が必要であったと語るが、この「愛」を外見によっておしはかることを重視する台詞はむしろクレオパトラの「本当にそれが愛なら、どれくら

いのか教えてちょうだい³⁶⁾』という台詞に近いものであり、このオクテーヴィアスの台詞をひいてジェフリー・マイルズは「オクテーヴィアスはローマのストア派的理想には不適任な体现者である³⁷⁾」と評している。クレオパトラを凱旋の飾りにしたいというオクテーヴィアスの欲望からもわかるように、オクテーヴィアスは自らの政治権力を飾り立てて誇示することには熱心で、こうした政治的思惑と姉オクテーヴィアへの肉親の情が合致した場合、オクテーヴィアスも「クレオパトラ的」な発言をすることがあるのだ。

また、オクテーヴィアスは一見クレオパトラの誘惑を全く意に介していないようだが、そのようなオクテーヴィアスが自分自身の「男性的魅力」とでもいふべきものをクレオパトラとの政治的駆け引きの初期段階で応用しようとしている点は特筆すべきである。エジプトがアクティアムで敗北した後、「シーザーは自分の性的関心をほのめかすことでサイディアスがクレオパトラをうまいこと釣り上げられるかもしれないと遠回しに言う³⁸⁾」。オクテーヴィアスはもちろんアントニーやジュリアス・シーザーのようにクレオパトラの魅力に恋しているわけではないが、政治のためならば自らのセクシュアリティという私的なことがらまでも外交に応用しようと試みる点においては、自らの最大の敵であり、節制や公的責任感というローマの美德を脅かす「怪物」であるエジプト女王クレオパトラと共通点を有している。オクテーヴィアスには妻リヴィアがおり、正妻オクテーヴィアを裏切ったアントニーの対抗者としては妻に対する貞節を貫かねばならないはずであるものの、政治的な目的で自らの性的魅力を利用することは厭わない。ローマには公私の峻別や節度を重視するストア派的理想がある一方で豪放磊落な英雄を称揚する別の理想像も存在しているが、オクテーヴィアスはそのどちらとも完全には相容れない部分があり、ゆえに「オクテーヴィアスにおいては、ローマの美德の単なる『形式的な』調子のみがその英雄的大志に完全に置き換わって³⁹⁾」いると評されるのである。

そしてオクテーヴィアスはクレオパトラの魅力に対して完全に不感症であるわけではない。リチャード・A・レヴィンはオクテーヴィアスが「見聞の点では大人同様ののに、当面の快楽のため自分がしてきた経験を棚上げし、分別に抗うガキども⁴⁰⁾」は叱りつけねばならないと語る場面をとりあげて「シーザーが自らを魅惑するようなセクシュアリティに投げつける悪口は、シーザーが自身の抑圧された欲望に警戒心を抱いていることを示している⁴¹⁾」と語っているが、オクテーヴィアスには性的欲望が完全に欠落しているわけではなく、彼は性的快楽の巨大な力を感じ取っているがゆえにその危険性に敏感なのだ。クレオパ

トラは使者サイディアスを通してオクテーヴィアスの父ジュリアス・シーザーとの愛情生活をオクテーヴィアスにほのめかそうとするが (III. xiii. 82-5)、この点に関してジャンネット・エーデルマンは、シェイクスピアは史実に手を加えてまでクレオパトラの政敵の父親たち自身がかつてはクレオパトラとの愛に溺れていたことを強調していると分析している (Adelman, p. 135)。クレオパトラはオクテーヴィアス自身の父をも愛によって取り込んだのであり、その結果見たこともない義理の弟がエジプトに存在していることを考えれば、エジプトの魅惑はオクテーヴィアスにとって完全に冷静に距離を置いて見られるものではない。クレオパトラの偉容はオクテーヴィアスも認めざるを得ないものであり (V. i. 64)、オクテーヴィアスもクレオパトラを完全に娼婦として断罪できるほどは謹直ではないのだ。最後の場面においてオクテーヴィアスは自殺したクレオパトラの埋葬に対して 'clip' 「かき抱く」 (V. ii. 359) という比喩を用いているが、青山誠子が指摘しているようにこの隠喩はアントニーが既に使用しているものであり (IV. viii. 8)、むしろアントニーにふさわしい「好色的な隠喩」である⁴²。そしてオクテーヴィアスは最後の最後にクレオパトラの美を 'As she would catch another Antony / In her strong toil of grace' 「雅にして強かな罫で別口のアントニーをひっかけようとでもしているかのようだ」 (V. ii. 347-8) と褒め称えるが、この「別口のアントニー」は大上治子が指摘しているようにオクテーヴィアスであり得る⁴³。この台詞はオクテーヴィアスもクレオパトラの魅力に鈍感なままではいられないことを暗示するとともに、クレオパトラという危険の根源が去ったことでやっとその魅力をたたえることができるというオクテーヴィアスの安堵感をも示している。クレオパトラと彼女が象徴するエジプトの驚異は、生きて活動している間はあまりにも危険であり、それを安全な場所から褒め称えるにはまずそれが破壊され、骨抜きにされ、死んだ後でなければならぬ。

3. 紳士の成型

オクテーヴィアスにとってのクレオパトラのように安心して褒め称えられないほど危険で理性を狂わす女の魅惑というテーマは、ルネサンスにおける「紳士の成型」という問題に関わっている。スティーヴン・グリーンブラットは著書である『ルネサンスの自己成型』第4章において、「紳士の成型」という問題を軸としてスペンサーの『妖精女王』第2巻第12歌のアクレイジアが支配する至福の宮 (the Bowre of blisse) の破壊を分析している。『妖精女王』における至福の宮は愛の妖術が支配する愛欲の歓楽宮であり、その女主人アクレイジアは

若い男たちを誘惑して虜にしては、飽きるとギリシア神話のキルケのように男たちを動物に変えてしまう。至福の宮は最終的に節制の騎士ガイアンに破壊され、アクレイジアは捕縛されるものの、「最後まで心をそそるような魅力を持ち続けている⁴⁴」。グリーンブラットは、アクレイジアが男たちに「自暴自棄、エロティックな耽美主義、意志の溶解、あらゆる征服の終末⁴⁵」をもたらすがゆえに「スペンサーにとって克己と権力のたゆまぬ行使を通してのみ実現される（中略）『礼儀』を脅かし⁴⁶」、それゆえ至福の宮は破壊されるのだと分析する。若き騎士ヴァーダントは至福の宮においてアクレイジアにすっかり魅了され、武器を捨てて「淫らな恋に、無益な豪華に、自らの日々と、財と、肉体を費やす⁴⁷」ことになるが、このヴァーダントの快樂への耽溺に対する批判は、かつては「将たる心臓⁴⁸」を有していたにもかかわらず今や「克己心をなくし、ジブシー娘の熱い心を冷やすふいごと扇になってしまった⁴⁹」というアントニーに対する批判と同様である。クレオパトラはしばしばキルケに喩えられるが⁵⁰、エーデルマンはこのクレオパトラのキルケ的な性質はまさにアクレイジアと似通っていると指摘している⁵¹。また、エーデルマンはクレオパトラが‘this great fairy’「この偉大な妖精」（IV. viii. 12）と呼ばれている場面をひいて、クレオパトラはアクレイジアであるのみならずイギリス的なフォークロアに基盤を持つ‘fairy queen’、「妖精女王」たるグロリアーナでもあり、シェイクスピアがスペンサーから影響を受けていることを指摘している（Adelman, 65-6）。妖精女王グロリアーナがエリザベス一世の寓意的表象であり、クレオパトラがしばしばエリザベス女王との類似性を指摘されていることを考えると⁵²、クレオパトラが偉大な女王グロリアーナでもありかつ男を惑わす魔女アクレイジアでもあるという両面的な表象は、弱き性として蔑視される女性でありながら最も偉大なる王でもあったエリザベス一世を頂点に戴くことで繁栄を維持していた、エリザベス朝という特異な時代におけるアンビヴァレントな女性表象を垣間見せるようでもある。

『アントニーとクレオパトラ』と『妖精女王』はエリザベス女王に関する寓意について共通する点が見られるばかりではなく、細部の比喩の点においても似たイメージの使用が見受けられる。第2幕第2場においてイノバーバスがクレオパトラとアントニーの出会いを語る場面では、クレオパトラのヴィーナスさながらの美しさについて‘The fancy outwork nature’「空想が自然に勝る」（II. ii. 201）という台詞が登場するが、『妖精女王』第2巻第12歌でも至福の宮について‘Art, as halfe in scorn of niggard Nature’「人工の技がしみつられた自然を半ば

侮蔑し」(2. 12. 50) という表現があり、アクレイジアが支配する至福の宮とクレオパトラが支配するエジプトはどちらも自然というよりは妙なる人工の技の産物として描写される。この自然に打ち勝つ人工というテーマは過剰な愛の快楽がartやfancyであってnaturalではないこと、つまりは「不自然」さがつきまどっていることを示唆しているとも考えられる。またの水のイメージにも共通性が見られ、どちらの描写にもキューピッドが居並び金銀に彩られた水辺が登場し⁵³、『アントニーとクレオパトラ』においては「かきまわされた水は襪のはばたきに恋いこがれて / 速く速くと追い求める⁵⁴」一方、『妖精女王』においては「羊の毛のようにふわりと花々が優しく水につかり / 水晶さながらの雫が気まぐれにむせび泣く⁵⁵」というように、水が擬人化されて恋煩いのイメージとともに用いられている。溢れる水が無限の色欲の寓意であることを考えると⁵⁶、クレオパトラとアクレイジアはともに水を統べることで愛欲を操る存在であり、技を駆使して男を虜にする魔女という共通の特徴を有している。

このようにクレオパトラとアクレイジアは男たちを愛欲によって支配する女として表象され、ともに男たちを節制の美德から遠ざけ、男たちが公的責任を勤勉に果たすことを妨げる。グリーンブラットはスペンサーがアイルランドの植民地行政官であったことを考慮し、アクレイジアをイングランドの紳士たちを惑わすアイルランド女性と比較して「紳士の形成は『妖精女王』の第2巻においてアクレイジアにより脅かされるように、アイルランドでは地元の女性によって脅かされるのだ⁵⁷」と分析しているが、『アントニーとクレオパトラ』においてはこの「アイルランド」を「エジプト」に置き換えても物語は成立する。イギリス・ルネサンスの時代において、アイルランドとエジプトを含むアフリカ地域は同じような野蛮な特徴を有する土地として表象される傾向があり、ルネサンス期の人々によるとアフリカ人は「アイルランド人がびいびい声を出して回るのと同じように叫んでいる⁵⁸」人々であった。「アイルランドはエジプトと同じように、怪物的でもあり肥沃でもあるものとして描写された⁵⁹」が、アイルランドはイングランドの植民地であるようにエジプトはローマの植民地であり、クレオパトラはローマの男たちが「紳士らしく」公的責任に忠実に振る舞うことを脅かす「地元の女性」なのだ。

そして最も重要なのは、節制の騎士ガイアンまでもが「語りによると自らの頑なな胸が『秘めたる喜び』を抱いたという事実ゆえにより無慈悲なものと化した厳格さをもって至福の宮を破壊した⁶⁰」ということである。ガイアンが至福の宮に密かなながらも魅力を感じていることは詩の中で示されているが(2. 12. 53、

同69など)、グリーンブラットはこの点について、ガイアンが至福の宮を完膚無きまでに破壊したのはガイアン自身がそれに魅力を感じているためであるとし、「魅力的であるとともに嫌気がさすようなものを粉碎することで彼らは自らの危険な憧憬に抗い、反社会的衝動を抑え、解放への強い欲望を征服する力を強めた⁶¹」のだと語る。このような魅力あるがゆえに危険なものを破壊するという点においてはオクテーヴィアスもガイアンと同じであり、至福の宮が節制の騎士ガイアンを魅了したがゆえに徹底的に破壊されねばならなかったのと同じく、エジプトはローマの志操堅固な政治家オクテーヴィアスに対してすら驚異の念を呼び起こすほどに豊かで美しいからこそ破壊されねばならないのである。

しかしながらアクレイジアとは異なり、クレオパトラはオクテーヴィアスの凱旋の飾りとして捕縛され、誇りを傷つけられる前に自ら死を選ぶ。クレオパトラは自殺する前にオクテーヴィアスのことを 'ass / Unpolicied' 「してやれたアホ」(V. ii. 307-6) と呼ぶが、これはクレオパトラがオクテーヴィアスの目論見を挫き、破壊される前に自らを破壊してしまったことへの一種の「勝利宣言」でもある。グリーンブラットはアクレイジアの捕縛についてこのように語っている。

「過剰」は固有にそなわっている不均衡や不適切さではなく、制御のメカニズム、抑制する権力の行使によって定義される。そしてもし過剰が実質的にはこうした権力によって発明されるのなら、逆説的に、権力も過剰によって発明されるのだ。これゆえアクレイジアは破壊され得ず、アクレイジアとそれが表象することになっているものは存在し続けねばならず、永遠に破壊的征服の対象となる。というのも、もしアクレイジアが不断の脅威として存在しなかったら、ガイアンが具現する権力も存在しなくなってしまうだろうからだ⁶²。

クレオパトラは捕縛されるかわりに自殺することでエジプトという驚異に満ちあふれた地を失った。しかしながらクレオパトラもアクレイジアと同じであり、ローマ人たちが節制の美德を掲げ続ける限り完全には破壊できない過剰さというものを体現している。クレオパトラとアントニーの愛が過剰にして偉大であったからこそ、クレオパトラに出し抜かれたオクテーヴィアスは最後に「どのような地上の墓もこれほど著名なる双璧を胸に抱くことはたえてあるまい⁶³」と語り、この二人の物語が永遠に語り継がれるであろうことを示唆するの

である。クレオパトラが象徴する過剰さと対置されるものとしてののみオクテーヴィアスの権力は存在することができ、ゆえにオクテーヴィアスはアントニーとクレオパトラという自らの敵たちを「顕彰」せねばならない。オクテーヴィアスがクレオパトラに与える称賛は、政治的な敵であったクレオパトラをアントニーの恋人として私的次元に閉じこめることで無毒化を図るためのものでもあるが、それと同時にオクテーヴィアスは過剰な愛という「不断の脅威」を常に破壊されるべきものとして保存せざるを得ないという奇妙なジレンマに陥る。ゆえに『アントニーとクレオパトラ』における偉大なカップルは忘れ去られることがあってはならず、たやすく脅威に変容しかねない顕彰の対象として維持されねばならないのである。

注

- 1 William Shakespeare, *The Riverside Shakespeare*, 2nd ed., gen. ed. G. Blakemore Evans (Boston: Houghton Mifflin, 1997)より *Antony and Cleopatra* (以降 Ant. と表記), II. i. 20-7. 以後シェイクスピア作品の引用に関しては、すべて *The Riverside Shakespeare*, 2nd ed. からの引用であり、訳文はすべて拙訳である。
- 2 H. W. Fawcner, *Shakespeare's Hyperontology: Antony and Cleopatra* (London: Associated University Press, 1990), p. 28. ローマの 'restricted economy' とエジプトの 'general economy' の対比については Fawcner の第 1 章を参照。
- 3 *Ant.* I. ii. 116-7: 'These strong Egyptian fetters I must break, / Or lose myself in dotage'.
- 4 *Ant.* I. ii. 128-30、同 152、II. ii. 90-1 など参照。
- 5 朱雀成子「「新しい天地」を求めて——『アントニーとクレオパトラ』をジェンダーで読む」、田村栄子編『ヨーロッパ文化と「日本」——モデルネの国際文化学』（昭和堂、2006）、pp. 106-27、p. 109。
- 6 *Ant.* II. ii. 205: 'O, rare for Antony!'
- 7 *Ant.* II. ii. 218: 'Rare Egyptian'
- 8 *Ant.* III. xi. 51、同 56、IV. xv.18、IV. xv. 70、V. ii. 114 など。
- 9 Clare Kinney, 'The Queen's Two Bodies and the Divided Emperor: Some Problems of Identity in *Antony and Cleopatra*', *The Renaissance Englishwoman in Print: Counterbalancing the Canon*, ed. Anne M. Haselkorn and Betty S. Travitsky (Amherst: University of Massachusetts Press, 1990), pp. 177-86, p. 178: 'The queen seems to be interchangeable with every aspect of her country and denizens'. 「女王は自らの国及び住民のあらゆる側面と交換可能であるように見える」。
- 10 Ania Loomba, *Shakespeare, Race, and Colonialism* (Oxford: Oxford University Press, 2002), pp. 112-34, p. 114: 'For the Romans, an identification between Cleopatra and Egypt was strategically necessary in order to highlight an absolute division between Rome and Egypt'.

- 11 朱雀成子 「「ヒーロー」としての Cleopatra、「ヒロイン」としての Antony — *Antony and Cleopatra* における「ジェンダー」と「セクシュアリティ」、『英文学研究』73(1)、pp. 15-28、p. 23。
- 12 Stephen Greenblatt, *Marvelous Possessions: The Wonder of the New World* (Chicago: The University of Chicago Press, 1991), p. 73: 'the marvelous is precisely the sense that will confirm the power and validity of Columbus's claims against those cavilling skeptics who want more tangible signs of gain. [...] it is — like the ritual of possession itself — a word pregnant with what is imagined, desired, promised'.
- 13 Edward W. Said, *Culture and Imperialism* (New York: Knopf, 1993), p. 118: 'to stage its antiquity, its wealth of associations, cultural importance, and unique aura for a European audience'.
- 14 *Ant. V. ii.* 183-4: 'Caesar's no merchant, to make prize with you / Of things that merchants sold'.
- 15 オクテーヴィアスは第3幕第6場24-38で自らが²征服した土地の分け前をアントニーから要求された際、アントニーが²征服した土地の分け前と交換でなければ要求には応じないと語っている。
- 16 この点に関しては、Vivian Thomas, *Shakespeare's Roman Worlds* (London: Routledge, 1989), p. 131 を参照。
- 17 *Ant. V. ii.* 336: 'She levell'd at our purposes'.
- 18 *Ant. I. iv.*44-7: 'This common body, / Like to a vagabond flag upon the stream, / Goes to and back, [lackeying] the varying tide, / To rot itself with motion'. 「この民衆というやつは、流れにあてどなく漂う旗印のように寄せては返し、移り気な潮の満ち引きにおもねって流れては腐っていく」。
- 19 *Ant. I. v.* 46: 'her opulent throne'.
- 20 *Ant. I. ii.* 153-5: 'a wonderful / piece of work, which not to have been blest withal / would have discredited your travel'.
- 21 *Ant. V. ii.* 208: 'an Egyptian puppet'.
- 22 浜名恵美 『ジェンダーの驚き——シェイクスピアとジェンダー』（日本図書センター、2004）、p. 246。
- 23 Christina Leon Alfar, *Fantasies of Female Evil: The Dynamics of Gender and Power in Shakespearean Tragedy* (Newark: University of Delaware Press, 2003), pp. 136-59, p. 155: the specularized prize of conquest Caesar desires to make her.
- 24 *Ant. I. i.* 13、III. vi. 67、同95など。
- 25 本橋哲也 『本当はこわいシェイクスピア』（講談社、2004）、p. 188。
- 26 Homi K. Bhabha, *The Location of Culture* (London: Routledge, 1994), pp. 70-1: 'colonial discourse produces the colonized as a social reality which is at once an 'other' and yet entirely knowable and visible'.
- 27 *Ant. III. vi.* 6-8: 'Caesarion, whom they call my father's son, / And all the unlawful issue that their lust / Since then hath made between them'.
- 28 inter-racial sexの結果としての 'monstrous birth' については Celia A. Daileader, *Racism, Misogyny, and the Othello Myth* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), p. 23 を参照。
- 29 *Ant. I. i.* 1-2: 'this dotage of our general's / O'erflows the measure'.

- 30 Julian Markels, *The Pillar of the World* (Ohio: Ohio State University Press, 1968), p. 44: 'a high ideal of selfless devotion to the public good'.
- 31 *Ant.* II. vii. 101-2: 'I had rather fast from all, four days, / That drink so much in one.'
- 32 Janet Adelman, *The Common Liar: An Essay on Antony and Cleopatra* (New Haven: Yale University Press, 1973), p. 134: 'The younger Caesar is apparently immune to Cleopatra's charms. He may dally with her for political purposes, but we know that his very dallying is passionless. But in the past, when men were more than men, the greatest Romans themselves overflowed the measure.'
- 33 Thomas, p. 105: 'it is impossible to imagine him sharing Antony's susceptibility to women'.
- 34 *Ant.* II. vii. 123-5: 'mine own tongue / Spleets what it speaks; the wild disguise hath almost / Antick'd us all'.
- 35 *Ant.* III. vi. 52-3: 'The ostentation of our love, which, left unshown, / Is often left unlov'd'.
- 36 *Ant.* I. i. 14: 'If it be love indeed, tell me how much'.
- 37 Geoffrey Miles, *Shakespeare and the Constant Romans* (Oxford: Clarendon Press, 1996), p. 174: 'Octavius is an inadequate representative of the Roman Stoic ideal'.
- 38 Richard A. Levin, 'That I might hear thee call great Caesar "ass unpolicied"', *Papers on Language and Literature*, 33. 3 (1997), p. 248 'Caesar insinuates that Thidias might best bait Cleopatra with hints of Caesar's sexual interest'.
- 39 Miles, p. 175: 'In Octavius the merely 'formal' strain in Roman virtue has completely displaced its heroic aspiration'.
- 40 *Ant.* I. iv. 31-3: 'we rate boys who, being mature in knowledge, / Pawn their experience to their present pleasure, / And so rebel to judgment'.
- 41 Levin, p. 247: 'The abuse Caesar hurls on a sexuality that fascinates him suggests he guards against his own repressed desires'.
- 42 青山誠子「*Antony and Cleopatra*における「高貴性」について」、『日本文学研究』64. 2(1987)、pp. 197-209、p. 209。
- 43 大上治子「『アントニーとクレオパトラ』——クレオパトラ、エリザベス、そしてローマ」、盛岡大学文学部編『文学部の多様な世界』（盛岡大学、2003）、pp. 929-946、p. 932。
- 44 Greenblatt, *Renaissance Self-fashioning*, p. 173: 'Acacia remains enticingly seductive to the end'.
- 45 Greenblatt, *Renaissance Self-fashioning*, p. 173: 'self-abandonment, erotic aestheticism, the melting of the will, the end of all quests'.
- 46 Greenblatt, *Renaissance Self-fashioning*, p. 173: 'they threaten 'civility' [. . .] which for Spenser is achieved only through renunciation and the constant exercise of power'.
- 47 Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, ed., A. C. Hamilton (New York: Longman, 1977), 2. 12. 80: 'in lewd louses, and wastefull luxuree, / His dayes, his goods, his bodie he did spend'. なお、これ以下の『妖精女王』からの引用はすべてこの版による。
- 48 *Ant.* I. i. 6: 'his captain's heart'.
- 49 *Ant.* I. i. 8-10: 'reneges all temper / And is become the bellows and the fan / To cool a gipsy's heart'.
- 50 Anna Brownell Jameson, *Shakespeare's Heroines: Characteristics of Women, Moral, Poetic, and Historical* (New York: George Bell, 1893) p. 256: 'Who does not know by heart the famous

- quotations in which this Egyptian Circe is described, with all her infinite seductions?’ 「このエジプトのキルケがそのあらゆる無限の誘惑をもって描写されている有名な引用を請んじていない人などいるものか」。
- 51 Adelman, p. 64: ‘She [Cleopatra], like the witch Acacia, is one of the daughter of Circe’. 「彼女は魔女アクレイジアと同じでキルケの娘の一人である」。
- 52 エリザベス女王とクレオパトラの関連性を論じたものは多数あるが⁸、Helen Morris, ‘Queen Elizabeth I “Shadowed” in Cleopatra’, *Huntington Library Quarterly*, 32(1969), pp. 271-8、Keith Rinehart, ‘Shakespeare’s Cleopatra and England’s Elizabeth’, *Shakespeare Quarterly*, 23(1), pp. 81-86、佐藤達郎『「アントニーとクレオパトラ」と「エリザベス一世への追悼歌」——「アントニーとクレオパトラ」研究(2)』、『山梨大学教育人間科学部紀要』1(1), pp. 221-8、及び先程あげた大上の論文などを参照。
- 53 *Ant. II. ii. 202* 及び *The Faerie Queen*, 2. 12. 60 参照。
- 54 *Ant. II. ii. 196-7*: ‘The water which they beat to follow faster, / As amorous of their strokes’.
- 55 *The Faerie Queen*, 2. 12. 61: ‘Their fleecy flowres they tenderly did steepe, / Which drops of Crisall seemd for wantones weepe’.
- 56 色欲の比喩についてはエドモンド・スペンサー『妖精の女王』和田勇一・福田昇八訳(筑摩書房、2005)第2巻、p. 137の脚注を参照。
- 57 Greenblatt, *Renaissance Self-fashioning*, p. 185: ‘As the fashioning of a gentleman is threatened in book 2 of *The Faerie Queene* by Acacia, so it is threatened in Ireland by the native women’.
- 58 Boemus, *The Fardle of Facions*, trans. W. Watreman (Amsterdam, Da Capo Press, 1970), vi. ‘shouting as they go with an Yrishe whobub’. アイルランドとアフリカの表象の類似に関しては、Michael Neill, ‘Broken Irish and Broken English: Nation, Language, and the Optic of Power in Shakespeare’s Histories’, *Shakespeare Quarterly*, 45.1 (1994), pp. 1-32, p. 4 も参照。
- 59 Francesca T. Royster, *Becoming Cleopatra: The Shifting Image of an Icon* (New York: Macmillan, 2003), p. 44: ‘Ireland, like Egypt, was depicted as both monstrous and fecund’.
- 60 Greenblatt, *Renaissance Self-fashioning*, p. 183: ‘the Bower of Bliss he destroys with a rigor rendered the more pitiless by the fact that his stubborn breast, we are told, embraced “secret pleasure”’.
- 61 Greenblatt, *Renaissance Self-fashioning*, p. 183: ‘In tearing down what both appealed to them and sickened them, they strengthened their power to resist their dangerous longings, to repress antisocial impulses, to conquer the powerful desire for release’.
- 62 Greenblatt, *Renaissance Self-fashioning*, p. 177: ‘“Excess” is defined not by some inherent imbalance or impropriety, but by the mechanism of control, the exercise of restraining power. And if excess is virtually invented by this power, so too, paradoxically, power is invented by excess: this is why Acacia cannot be destroyed, why she and what she is made to be represent must continue to exist, forever the object of the destructive quest. For were she not to exist as a constant threat, the power of Guyon embodies would also cease to exist’.
- 63 *Ant. V. ii. 359-60*: ‘No grave upon the earth shall clip in it / A pair so famous’.